

学校における死についての教育の実態と実践について

岡田 芳 廣

1. はじめに

近年、「誰でもいいから殺したかった」と無差別に人を殺したり、いじめを苦にして自殺したりするような若者のいのちにかかわる事件が起きている。その原因として、一般的に規範意識の低下や生命を軽視する風潮などが挙げられているが、根源には、死への無認識、無自覚が大きな要因になっているのではないだろうか。テレビや新聞の報道では、毎日のように天災、人災、戦争、テロなどで多くの人の死が平然と報道されている。また、映画やドラマでも人が殺される場面が数多く映し出されている。さらに、若者たちの間で流行しているコンピューターゲームでは、ゲームの中で敵を殺して先に進んでいくようなものやいのちを簡単にリセットしてやり直しをするようなものもある。このように死が日常生活の中に氾濫しているが、その死は映像やバーチャルの世界のものであって、実体験に基づいたものではない。また、都市化、核家族化、少子化が進むに従い、身近なものの死の場面（臨終）に立ち会うことも少なくなってきた。子どもたちの中には、死は病院で迎えるものと思っている者もいる。

次頁の表は、平成17年に世田谷区立船橋中学校で行われた中学生の死生観に対する意識調査である。数値は、各項目を重複して選ぶことを可能として、その項目を選んだ生徒の全体数(337人)に対する割合(%)である。「いのちは死んでもよみがえる」と思っている者が9.3%、「死は気分がよい」と思っている者が2.6%、「死はやり直しをすることだ」と思っている者が7.8%もいる実態は深刻な問題である。さらに、「死は悲しいことだ」と思っている者が56.4%しかいないことは驚くべきことである。このような中、「死は運命として避けることができないこと」とあるという項目を選んだものが最も多いように、死は子どもの心の中にも無意識に存在する。しかし、死を自覚しないで漠然とした無意識の状態のままに放置しておくことは、青少年の自殺問題のように心理学的にもとても危険な状態である。また、人生をより良く生きるためには、死について考え、死を認識し自覚することが重要である。そのためには、死についての教育を学校において計画的に実施することが必要である。そのような動きの中、上智大学のアルフォンス・デーケンを中心に「生と死を考える会」が1982年に発足し、活動を始めた。しかし、教育現場では依然として死をメインテーマとして扱うことをタブーとし避ける傾向《注》が全国的にみられ、死についての教育の広がりはあまり進んでいない。本論文では、学校において死がタブーとされる原因を考察するとともに、中学校における先進的な実践を通して、死についての教育の在り方について考えていきたい。

人の「いのち」の認識 (％)

	全体	1年	2年	3年
永久に続くもの	22.1	25.8	20.0	19.7
親から子へとつながっていくもの	53.2	56.1	55.8	47.9
自然現象としてつくられるもの	14.8	18.9	13.7	11.1
死んでも再びよみがえるもの	9.3	15.9	6.3	4.3
死によって終わってしまうもの	38.4	29.5	47.4	41.0
親の願いによってつくられるもの	11.0	16.7	8.4	6.8
その他	16.2	28.7	24.2	24.8

人の「死」の認識

	全体	1年	2年	3年
悲しいこと	56.4	57.6	63.2	49.6
消えてしまうこと	28.8	25.0	41.1	23.1
気分のよいこと	2.6	2.3	3.2	2.6
全てが終わってしまうこと	38.1	34.1	51.6	31.6
怖いこと	29.1	34.1	31.6	21.4
自然に訪れること	47.1	50.0	41.1	48.7
運命として避けることができないこと	64.8	68.9	57.9	65.8
やりなおしをすること	7.8	11.4	10.5	1.7
現実から逃げること	7.0	7.6	9.5	4.3
その他	29.0	40.9	28.9	23.9

《注》平成23年11月に開催された第18回日本道徳教育学会では、パネルディスカッションのテーマとして当日の参加者にアンケートを取り、「学校教育における死へのタブー観」を取り上げている。また、平成25年11月に開催された第42回関東甲信越中学校道徳教育研究大会では、予定されていた「尊厳死」の研究授業が当日他の主題に変更されるような事例もある。

2. 学校における死のタブー観

まずは学校において死がタブー視される原因を探っていきたい。学校教育における教育課程の基準である学習指導要領には生命については、学習すべき内容として記載されているが、死については書かれていない。生命について教育を実施すれば当然のこととして生命の終わりである死について学習を進めていかなければならない。しかし、死そのものについて踏み込んで学ぶことはほとんどない。なぜこのように死についての教育が学校で避けられているか、その理由として、次のようなことが考察される。

① 宗教との関係

死について教育を進めていくと、来世、輪廻転生、天国と地獄、霊魂など宗教に深くかかわる考え方や葬式など宗教的な儀式に触れることになる。このことは、憲法の政教分離（第24条3項）を根拠に教育を行っている公立学校では、信仰上の理由で修学旅行において神社仏閣への参拝をしない生徒や合格祈願のお札を教室に備えることにクレームをつける保護者の存在が問題となるなど、宗教と関わることを極力避ける傾向がある。この傾向は宗教とのかかわりの深い死についての教育にも影響し、その実施を差し控える原因の一つとなっている。しかし、平成18年の教育基本法の改正により宗教教育（15条1項）「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、尊重されなければならない」と、新たに「宗教に関する一般的な教養」が付け加えられた。今後、この言葉の意図に従い、死を含めた一般教養的な宗教教育が行われる余地が生まれてきた。

② 戦時教育の反省

日本には古くから自然とのかかわりの中で地域を中心とした住民のつながりの中から育まれた神道的な死生観と武士社会の中から生まれた儒教思想に基づいた武士道の死生観があった。明治になりこれらの死生観が、日本人の死生観として形作られてきた。しかし、先の大戦においてそれらが天皇を中心とする国家神道と忠君愛国の支えとなる武士道へと変わっていき、「お国のために」との掛け声のもとに多くの兵士の尊いいのちを奪うこととなった。戦後の教育はこの反省に立ち、民主主義と平和教育に重点を置いて、戦争により失われて多くの人々を通していのちの大切さについて指導が進められてきたが、戦時教育に立ち返る恐れがある死についての教育は避けられる風潮があった。その代表的な事例の一つとして、昭和33年に道徳教育が導入された時、戦前の修身教育の復活だとして強く非難されたことが挙げられる。このことは、いのちの教育を推進するべきである道徳教育の普及に暗い影を写すことになった。

③ 暗く重苦しい内容

授業は楽しく、子どもたちが生き生きと学ぶ授業を大切にしている教師にとって、死に関する授業は、暗く重苦しく授業になりがちになるという理由で避ける傾向がある。しかし、日本における死生学、デス・エデュケーション、死の準備教育の先駆者であるアルフォンス・デーケンは、死はユーモアにつながると述べている。このことは実際に、死に直面しているホスピスの患者が残りの人生を明るく有意義に生活をしていることからもうなずけることである。また、教師の中には大人になればいずれ死について自覚する時が来るのだから、子どもの時に無理して教えることはないと考え、指導を先に延ばしている者もいる。しかし、長崎県佐世保市で起きた小学6年生の女子児童による同級生の殺害事件のように、死の認識がない状況で「死ね」とか「殺してやる」と無意識に言っているのとは大変危険なことである。

④ 短絡的な行動や自殺（自死）の恐れ

いじめを苦にした自殺事件、アイドル歌手の自殺に対する後追い自殺の連鎖事件のように青少年が簡単に自殺（自死）に走ることが問題（平成24年度20歳未満の自殺者は全国で545人）とされている。このような状況において、教師の中には死について学ぶと、子どもが死を美化したり、同調したりと自殺をますます煽ってしまうことになるのではないかと指導を躊躇する者がいる。死について学習すると、人間は誰も死を避けることができず、いのちは死をもって終わるという「生命の有限性」を学ぶ。このことにより、子どもの中には「どうせ死ぬならば」と投げやりな考え方や短絡的な行動をとる者が現れるのではないかと危惧する教員もいる。しかし、死をいたずらに恐れさせるのではなく、この世に生を受けたものはすべて死をもって終わること、人生という有限の時間を有意義で充実したものにする、そして、いのちは自分一人のものでなく家族をはじめ多くの人々との絆でつながっていることをしっかりと指導することが大切である。

⑤ カリキュラムや指導方法が未確定

生命倫理問題、安楽死問題、ターミナルケア等の課題に直面している医療分野では、1970年代より大学医学部や看護学校等において死についての教育が行われるようになった。教育界では、2002年より『『死への準備教育』研究会』を中心に具体的な研究・研修や教育実践が始まっている。しかし、そのような試みも死へのタブー観のためか、一部の教師の個人的な取り組みとなり、一般の学校の中への広がりが見えない。このために、死についての指導方法や教材が確立しておらず、そのカリキュラムや指導計画も作成されていない状態である。今後、死についての教育が全ての学校において実施されるためには、指導のマニュアル化が望まれる。そのような中、近年になり聖路加国際病院の医師である日野原重明の「いのちの授業」や作家・作詞家の新井満の「死の授業」など教育界以外からも取り組まれるようになってきた。

⑥ 教師の指導力不足

現在、青少年の凶悪犯罪や自殺の増加に対して多くの教師が死についての教育の必要性を感じているが、自ら積極的に取り組んでいる者は極めて少ない。その原因は、現場に立つ教師自身が死についての教育を学校で受けていないことにある。また、若い教師の中には死そのものの体験のない者もいる。そのような状況において、子どもたちに死についての教育を実施するための専門的な知識や技能を有していないとともに、死についての考え（死生観）や死に基づいた人生観を教師自身がしっかり持っていないものも多い。このことが、教師が死についての教育に取り組むことのために与えている原因の一つになっている。昭和33年、道徳教育が始められた時の学習指導要領には「教師も生徒もいっしょになって理想的な人間のあり方を追求しながら、われわれはいかに生きるべきかを、ともに考え、ともに語り合い、その実行に努める」と書かれているように、いろいろな考え方のある死やいのちについて、生徒ともに取り組んでいく教師の姿勢が大切であろう。

3. 実践事例

学校において死がタブーとして取り扱うことが嫌厭される中で、近年、前向きに死についての教育に取り組む学校が現れてきた。ここでは、そのような取り組みを行った公立中学校で実践された4つの事例を取り上げて、指導の在り方を考察してみる。

① 人権教育における取り組み

右の写真は、人権教育として、人権課題「被犯罪被害者」をテーマに行われた日野市立日野第一中学校の「生命のメッセージ展」である。「生命のメッセージ展」とは一人息子を無謀な運転の犠牲者として亡くした鈴木共子を代表理事として、交通事故遺族16名が発足したアート展である。殺人・悪質な交通事故・いじめなどで生命を奪われた犠牲者の身長の人型パネル「メッセンジャー」を展示している。「メッセンジャー」には、生前の写真と残された家族からのメッセージが添えられ、足元には生きていた証として遺品の靴が置いてある。これらは普段、日野市にある「いのちのミュージアム」に展示してあるが、希望があれば貸し出しと、命についての講演や授業も実施してくれる。犠牲者の声なきメッセージを通して、いのちの重さや尊さを訴え、犯罪のない社会を創造し、未来の命を守ることを目的としている取り組みである。日野第一中学校では、人権教育としてこのメッセージ展を校内で行い、全校生徒に参観させた。次の作文は、参観した生徒の感想である。



生命のメッセージ展を見学して、率直に「今を大切に生きたい」と思いました。親とケンカして、カッとなって友達に「死にたい」や「殺したい」と言っていました。でも生命のメッセージ展を見て、一人一人の人がどのようにして亡くなっていったのかを見ました。その瞬間、今までの自分が一気に嫌いになりました。簡単にあんな言葉を言っていたこと後悔しました。死にたくなっても亡くなってしまった人にすごく悪い気持ちになりました。それぞれの気持ちや家族の思いなどが1枚のパネルにすごく詰められていると思いました。生命のメッセージ展を全国の人に見てほしいと思います。今を大切に、これからを大切に、一生懸命に生きていきたいです！もう何があっても「死にたい」なんて言いません！

「死にたい」と思ったときは、真っ先に生命のメッセージ展のことを思い出します。これからの私の目標は、「今を大切に生きる」です。このことを忘れずに生きていきたいです。

（一部省略）

この感想文からもわかるように、犯罪被害者の死という事実と家族の悲しみを伝えるパネル「メッセンジャー」は、死を通して、いのちの大切さ、今を大切に生きること、家族の絆を生徒たちに伝え

ている。

② 性教育における取り組み

平成22・23年度文部科学省指定人権教育研究指定校である長野県茅野市立英明中学校の研究発表会で実施された授業である。授業は性教育において、出産といういのちの誕生と中絶といういのちの死を扱うことにより、いのちの大切さを考えさせるものである。授業には、地域で長く出産に立ち会ってきた助産師をゲストティーチャとして招聘し進められた。展開の概要は次の通りである。

- 講師の紹介
- 講師の話
 - ・針穴が開いている白い紙を配布し、針穴の大きさが受精卵と同じであることを説明する。
 - ・受精卵が命の始まりであることを説明する。
 - ・生徒たちに目をつぶらせ、今の自分から過去の受精卵に遡らせる。
 - ・目を開けさせて、自分の出産を想像させる。
 - ・出産の様子（胎盤、へその緒、新生児など）について説明する。
 - ・10か月頑張った母親、出産に立ち会った父親の気持ちなどを通して親の愛を伝える。
 - ・出産を望まないために殺される（中絶される）いのちがあることを伝える
 - ・あなた方が命を作る番であることを伝える。
- 感想をワークシートに記入し、発表する。
(生徒の感想)
 - ・両親のもとに生まれてきて良かった
 - ・自分を全力で守ってくれた人がいてくれてうれしかった
 - ・無事生まれることができて良かった
 - ・命を大切にしたい
 - ・自分は無責任になりたくない
- 生命とはどのようなものか考える

授業は、親子二代にわたり地域に根差して活動している助産師の経験談をもとに構成されていて、ゲストティーチャの力量が十分に発揮された授業であった。1時間の授業の中で、出産といういのちの誕生の喜びと中絶という死の悲しみを上手に対比させていた。特に、中絶による死を扱うことにより、いのちを大切にしたいという心情や人間としての生き方についての考えが深まっていた。

③ 道徳教育における取り組み

道徳教育では、指導内容として「生命の尊重」という道徳的価値を設定している。この道徳的価値を指導するときは、生命の「有限性」「連続性」「偶然性」という三つの視点から指導を行っている。生命の有限性を指導するときに死について触れることになる。しかし、死そのものをメインテーマとして指導する事例は少ない。そのような状況において、人間の死をテーマにした数少ない事例を二つ紹介する。

《事例 1》

この事例は、第 45 回全日本中学校道德教育研究会香川大会において行われたものである。授業者の体験を資料として、死を間近に控えた主人公が残りの時間をどのように過ごすかという課題を通して、生命の有限性や生きることの意義について生徒に考えさせている。与えられた命の時間を、長短ではなく、主人公の一時の輝きを通して、生き方の大切さについて考えさせている。

【学習指導案】

ねらい いのちを大切にすることの意味を深く考えることにより、生きることのすばらしさを感じ、いのちをいっぱい輝かせて生きようとする態度を養う。

学習内容及び学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 いのちを大切にすることはどういうことかについての考えを発表する。</p> <p>2 資料を読んで考える。</p> <p>(1) 資料前半を読んで、先生がコンサートを開くことを賛成するかどうか考え先生に手紙を書く。</p> <p>(2) 自分の気持ちをネームカードで表し、意見交換をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のいのちは一つだから大切にしたい。 ・自分は両親に望まれて生まれ、大切に育てられた。 ・自殺をしない。 ・人を傷つけない。 ・賛成 先生のいのちだから後悔のないように生きてほしい。 ・反対 先生には一日でも長生きしていつまでも自分たちに音楽を教えてほしい。 ・友達の意見を聞き、いのちを大切にすることは先生にとって後悔しないことなのかなと思い始めた。 ・人はいつか死んでしまうけど、やはり長生きできることは幸せだと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年の道德の授業で考えた「いのちとは何か」や集団宿泊学習での家族からの手紙を読んだ時の感想、「いのちのせんせい」の講演会のことを思い出させ、考えさせる。 ・CD で資料を流す。 ・私の立場になり考えさせる。 ・ワークシートの心情円に自分の気持ちを記入させることにより、賛成や反対に決めることのできない気持ちを表現させる。 ・このコンサートが先生と同じ病気の人のためのチャリティーであることコンサートを開くことで先生の寿命は縮まることをおさえる。 ・ネームカードを貼る場所が考えの変化を表すことを伝える。 ・初めと意見が変わった人を意図的に指名して、意見を発表させる。
<p>先生の顔が笑っているように見えたことで、私はどんなことに気付いたのだろうか。</p>		
<p>(3) 資料後半を読んで、先生の顔はなぜ笑っているように見えたのかを考える。</p> <p>(4) 先生の生き方から私はどのようなことに気付いたか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・後悔していないから。 ・満足したから。 ・やり遂げたという気持ちから。 ・長生きすることも大切だけど、納得する生き方も大切だ。 ・自分の使命をあきらめないで貫くことは大切だ。 ・亡くなった後も精一杯生きた証がある。人の心に残る生き方をすることが大切だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンサートの様子を流すことにより死を恐れるよりも今を精一杯生きようとしている先生の姿を伝える。 ・先生の気持ちを考えさせることで、より私の気付きに迫らせる。

3 教師の話を書く。		<ul style="list-style-type: none"> ・先生の死が私にとって悲しいことであることにも触れ、反対した生徒のフォローになるようにしたい。 ・具体的なエピソードを話すことにより先生を失った今でも叱咤激励されていることや、精一杯生きることの素晴らしさを伝える。
4 いのちを大切にすることとはどういうことか感じたことをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もやりたいことを見つけて納得できる生き方をしたい。 ・自分のいのちを精一杯生きることが、いのちを大切にすることになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の初めと終わりでは命の大切さについてどのように自分の考えが変わったか、深まったかについてまとめさせる。

評価 精一杯いのちを輝かせて生きることが、いのちを大切にすることなのだ気づくことができたか。

【資料】

ラストコンサート

今までの人生の中でどれくらいの死に向き合ってきたことだろう。死はそこにその人の存在がないことを示す。しかし死とともに人は生きてきた記憶も消してしまうのだろうか。私には、あまり多くの経験はないけれど、生きることと死ぬことの意味を深く考えさせられたでき事があった。

私には尊敬するピアノの先生がいた。大学でピアノを教えるだけにとどまらず、ご自身も常に勉強を重ねておられ、いつも新しいことにチャレンジされる姿に我々学生は憧れていた。先生の思い描く世界は地元や日本ではなく、海外にあり、何事にも動じることなく突き進む強さが素敵であった。私にとって先生はピアノだけでなく人間としての生き方を教えてくれた特別な存在だった。私が大学三年生のある日その先生を乳がんが襲った。早期発見で片方の乳房を失ったものの手術は成功して、すぐに復帰した。

それから数年何もなかったように過ぎ、先生は相変わらず第一線で活躍されていた。しかし、再び先生ががんが襲った。今度は肺からリンパ節へと転移したのだ。薬の副作用で髪の毛は抜け、体力も日に日に落ちていった。がんの進行とともに強い薬を使用することになり、その注射をした日は動くことができなとおっしゃっていた。そんな苦しい日々を送り、入退院を繰り返していた先生は、それでも生きる意欲を失わないように見えた

ある日、お見舞いに行くと、ベッドの上の先生が私に、その鞆から書類をとってくれという。なんと二ヶ月後にコンサートをするというのだ。もちろん医者には「コンサートだなんてとんでもない。早く死にたいのか、やめなさい。」と止められていた。しかし先生は寿命を縮めることになってもコンサートを実行すると強く決意していた。なぜなら、それはチャリティーコンサートで、収益金は小児がんで苦しむ子どもたちへ全額寄付するというものであったからだ。しかし、コンサートを開くとなると少なくとも一日十時間以上の練習をこなさなくてはならず、かなりの体力が必要だ。ましてやデュオ（二人で演奏すること）となると一人一人の膨大な練習の他にも、楽曲に対する解釈や演奏方法などで、かなりの話し合いの時間が必要になり、そのため根気と深い信頼関係が必要とされる。私はその時先生の強い決意に心を打たれたものの、複雑な思いを抱えたまま、何も言わずに病室を出たのだった。数日後、いろいろ考えた私はいたたまれなくなり先生に手紙を書くことにした。

その後退院した先生はコンサートを開いた。ステージの上の先生は輝いていた。ほとんどの人は先生が病と闘っていることを知らずに演奏を楽しんでいた。私は一人、このコンサートが先生にとって最期なることを感じて胸が張り裂けそうであった。一曲が終わるたびに安堵しながら、あと少し、あと少し頑張ると祈るよ

うな思いで聴いていた。最後の方は涙をぬぐいながら聴くことしかできない私であった。コンサートは無事終了し、先生の素晴らしい演奏と流れるような音色はだれの心をもとらえて離さなかった。

しかし、その後先生は経過が思わしくなく、東京の病院へと移った。「病気を治すべく東京に行きます。治って帰ってくるから待っていてね。」という前向きなメールを残して。しかしそれ以降連絡は途絶えた。風のうわさでこちらに帰ってきていることを知ったが、こちらの病院でやはり入院しているようであった。何度か電話やメールをしてもすべてなしのつぶでだった。

ある日やっと電話が通じた。でもその声にはもうすでに元気がなく、しゃべるのがやっとの様子だった。でも先生は生きることをあきらめてはいなかった。それから数週間過ぎ、また電話が通じた時、私は「先生にお会いしたいです。今家の下にいるから。」と伝えた。でも先生は、骸骨みたいだから会わないとおっしゃった。何度お願いしても二度と会ってくださらなかった。

そしてそのしばらく後、先生の命は消えてしまった。私はいっぱい泣いた。どうしてもっと生きていてくれなかったのか。コンサートなんかしなくてもよかったのに。生きてさえいてくれれば……。悲しくてつらくて悔しい思いを胸に、そっと棺に近寄り、先生のお顔をのぞきこんだ。涙でかすむ目で見たそのお顔はなぜか笑っているように見えたのは、私だけだったのだろうか。（河田真紀・作）

《事例 2》

平成 17・18 年度の 2 年間にわたり世田谷区教育ビジョン推進研究指定校として、「生命を尊重する心の育成 ～道徳の時間を通して～」をテーマとして研究した世田谷区立船橋中学校の実践である。研究はまず生徒たちに、いのちに関する生活体験・環境に関するアンケート調査を実施した。その結果や日頃の生活態度をもとに、あいまいな死生観を持つ生徒に対して、道徳の時間において「生命の誕生」と「死の尊厳」、そして「人生をより良く生きる」という 3 つの主題を設定し計画的に指導することにより、生命を尊重する心を育成することができると仮説を立て、授業で実証している。指導計画は、第 1 時に「生命の誕生」を通して、生命の偶然性と生命の連続性を扱い、第 2 時には「死の尊厳」を通して、生命の有限性について取り扱う。さらに第 3 時には誕生と死に触れつつ、人生をより良く生きることの大切さを自覚させる。

【指導計画】

第 1 時	主題名 「生命の誕生」 資料名 「自分の誕生（保護者からの手紙）」 ねらい 自らの生命の尊さに気づかせ、喜びと感謝の気持ちを持ってより良く生きようとする心を育てる。
第 2 時	主題名 「死の尊厳」 資料名 「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」 リリー・フランキー著 （オカンの臨終の場面 377 ページ 2 行～383 ページ 3 行） ねらい 「死」の場面が描かれている教材を通して、生命が有限であることに気づき、生命を大切にす心情や態度を培う。
第 3 時	主題名 「人生をより良く生きる」 資料名 「大きな古時計」 出典：Grandfather's Clock 作詞・作曲 ヘンリー・クレイ・ワーク 訳詞 保富康午 ねらい 自らの生命の尊さに気づかせ、前向きによりよく生きようとする態度を育てる。

【第2時学習指導案】

	学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	<p>1. 前時を振り返る。 今私たちは、命の大切さについて学習しています。 「身近な人が亡くなった経験のある人はいますか。」 「死んだ人を実際に見たことがある人はいますか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「ありません。」 ・「一緒に住んでいたおじいさん」 ・「ありません。」 ・「おじいさんのお葬式の時に見ました。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり無理して聞き出すことはしない。 ・実際に死体を見た経験をきくことにより、資料を読む前に、「死」の重さを予感させたい。
展開	<p>2. 資料を読み、次の発問について話し合う。</p> <p>① ボクはなぜベテラン看護婦の態度に怒りを感じたのか。 「では、あなたがこの病院の看護婦として働いていたとしたら、どうでしょう？」</p> <p>「自分で、人の死について軽く考えているな、と思う場面はないかしら？」</p> <p>「ゲームなんかで、人が死ぬのはどんな感じ？」</p> <p>「もういくつか質問があります。各自じっくり静かに考えてほしい内容なので紙に書いてもらいましょう。」</p> <p>② オカンは、最後に何を言いたかったのだろうか。</p> <p>③ 「穏やかな死に顔」は、何を意味しているのだろうか。</p> <p>④ 人の「死」とはどのようなものだと思うか、自分の考えをまとめてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「よくあることとして、気楽に話している感じがしたから」 ・「家族の気持ちを考えていないと思ったから」 ・「う～ん、そんなに気を使っていられないと思う。」 ・「オカンを前から知っている知り合いだったら、一緒に悲しむと思う」 ・「仕事だから、感情に流されてはかえっていけないと思う」 ・「ボクと目が合ったとき、気まずそうにしたのがいけないと思う」 ・「人が死ぬのには、慣れていくと思う」 ・「死ね！」とか言ったことがある ・「ニュースで戦争や事故の現場など普通に見ている」 ・「ま、ゲームだし……」 ・「本当の人間が死ぬのとは違うと思っている」 <p>(生徒はそれぞれに意見をワークシートに書く)</p> <p>(生徒はそれぞれに意見をワークシートに書く)</p> <p>(生徒はそれぞれに意見をワークシートに書く)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・看護婦の態度から、死の尊さについて考えさせたい。 ・立場が違った時、死をどう受け止めるか、いろいろ考えさせる。 ・「人の死」に慣れている自分に気づかせたい。 ・書くことで、生命に対する自分の考えを深めたい。 ・死をもって全てが終わってしまうことに気づかせたい。 ・人生を一生懸命生きることの大切さに気づかせたい。 ・命は有限で、かけがえのないものであるなので、大切に、人間らしくより良く生きようとする気持ちを育てたい。

展 開	「では、何人かの人に意見を発表してもらいましょう。」	・意見を発表する。	・他の生徒の意見を聞き、自分との違いなどを感じる。
終 末	3. オカンの遺書を聞く。 4. 「心のノート」 p. 74～を読む。	・オカンがどういう気持ちでその一生を終わろうとしていたのかを知る。 ・「この小説を読んでもみよう」と思う。 ・この1時間の授業をまとめる。	・オカンがどういう気持ちでその一生を終わろうとしていたのかを知る。 ・「この小説を読んでもみよう」と思う。 ・この1時間の授業をまとめる。

家族や身近なものの死（臨終）に立ち会った体験がほとんどない生徒たちの授業に対する感想は、次のようなものであった。

人が死ぬということは、最後の時が来たということだ。手も足も動かない、終わりというもの。たくさんの人が悲しむものである。最後の時は誰にだって必ずやってくるものなのだから、一日一日を大切に過ごしていこうと思う。

世田谷区立船橋中学校の研究実践では、死についての指導を3時間扱いの2時間目に位置づけている。指導計画が確立していない現在、生命の誕生をはじめに扱い、次に死をもって生命の有限性に気付かせてから、限られたいのちの時間を大切に生きようとする態度を養う、「誕生・死・より良く生きる」という3時間の指導の流れは、一つの方向を示しているように思う。

4. 終わりに

平成23年3月11日、一瞬にして多くの人々の命を奪った東日本大震災は、我々に人の死といのちの重さ、人間としての在り方生き方についてあらためて考えさせた。約1万8千人にのぼる人々の死は、死は個人体験ではなく、人類の共有体験であることを再認識させた。また、我々は常に他者とのかわりの中で生活し、人と人とは絆によって深く結ばれていることを認識させ、絆の大切さについて深く自覚させた。さらに、我々はどのようにして人生を生きるべきかについても改めて問題提起してくれた。この世に生を受けて死ぬまでの人生をどれだけ生きたかという時間の長さ（クロノス時間）ではなく、その時その時をどのように生きてきたかという時間の質（カイロス時間）であることに気付かせてくれた。このように人間にとって避けることのできない死について学び、死についての認知・自覚を深めていくことは、今、学校教育が目指している生きる力（生き抜く力）を育むことには欠くことができない内容である。生きる力は知育・徳育・体育の調和によって育成される。しかし、三つの教育のうちのどれか一つでも不十分な子どもにおいては、社会の中でよりよく生きていく能力は低いと考えられる。そのような子どもに対しては、なおのこと死についての教育が必要である。

最後に、学校において死についての教育を実施するには、どの時間で扱うかが問題となる。高等学校では倫理や現代社会で実施することも可能と思われるが、全ての生徒が学ぶ状況ではない。義務教育である小中学校においては、総合的な学習の時間や特別活動の中に設定していくことも考えられるが時間的な余地はほとんどない。このような現状に対して、道徳教育において死について学ぶ時間を設けていくことが、最も実現可能であると考えられる。道徳教育は児童生徒の実態や発達段階を考慮して、計画的・発展的に実施され、現行の学習指導要領からは高等学校でも実施されることになった。そのような道徳教育では、指導内容の一つである「生命の尊重」の考察において「身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。そのためか、生命軽視の軽はずみな行動につながり、社会的な問題となることもある」と死の体験不足が指摘されている。また、道徳の時間の指導における配慮とその充実においては、人間としての生き方についての自覚を深めるために、「生や死の問題」を具備する教材を選択するよう心掛けることが提言されている。(中学校学習指導要領解説 道徳編)このような道徳教育において、「死」を指導内容の中に位置づけて、全ての学校において「死についての教育」を実施していくべきである。

【参考文献】

- ・ 碓井真史 「誰でもいいから殺したかった！」 KK ベストセラーズ ベスト新書
- ・ ハイデガー 「存在と時間」 岩波文庫
- ・ 河合隼雄 「ユング心理学入門」 培風館
- ・ アルフォンス・デーケン 「生と死の教育」 岩波新書
- ・ 小浜逸郎 「死の準備」 死は生を肯定する条件である 洋泉社
- ・ 島蘭 進 「日本人の死生観を読む」 明治武士道からおくりびとへ 朝日選書
- ・ 加藤周一 「日本人の死生観」 岩波新書
- ・ 新渡戸稲造 「武士道」 岩波文庫
- ・ 日野原重明 「生きているだけで100点満点」 ダイヤモンド社
- ・ 新井 満 「死の教育」 ようこそ先輩の記録 NHK 出版
- ・ 宇都宮直子 「『死』を子どもに教える」 中公新書ラクレ
- ・ 古田晴彦 「高校生のための『いのち』の授業」 祥伝社 黄金文庫
- ・ 平成23年度人権教育推進資料 第8号 東京都中学校長会人権教育推進委員会
- ・ 平成24年度人権教育推進資料 第9号 東京都中学校長会人権教育推進委員会
- ・ 堀込 太 特別活動学習指導案 長野県茅野市立英明中学校
- ・ 河田真紀 「生命尊重に関する実践例」 教師の実体験を基にした自作資料を通して
中学校道徳教育実践事例集4 全日本中学校道徳教育研究会
- ・ 平成17・18年度 世田谷区立船橋中学校研究紀要 「生命を尊重する心の育成～道徳の時間を通して～」
- ・ リリー・フランキー 「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」 扶桑社
- ・ 平成19年 文部科学白書 第2節 豊かな心と健やかな体をはぐくむ
- ・ 平成20年 中央教育審議会 答申
幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について
7. 教育内容に関する主な改善事項 (4) 道徳教育の充実

-
- ・平成 20 年 いじめ等防止指導資料 子供の命を守ろう～子供の自殺予防に向けて～ 東京都教育委員会
 - ・昭和 33 年 中学校学習指導要領 文部省
 - ・平成 20 年 中学校学習指導要領 文部科学省
 - ・平成 20 年 中学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省